

## 眞宝愛

愛という言葉は、仏教では迷いの情を表わすのに使われている。新聞の三面記事にぎわしているのかもしれないが「愛」についての醜悪な事実である。愛は執着であり、その裏には憎悪を持っていくからである。愛と憎とは裏表である。仏教では仏心を慈悲と言う。厳密には「愛」と「慈悲」とは別たるべきである。

愛は否定されなければならない。否定するものは、我ならぬもの、即ち如来の本願力である。眞実である。智慧である。

親鸞聖人は、御自身のことを「小慈小悲もなき身」であると告白せられた。

しかるに、我等は、偉大なる慈悲を感じずにはいられないのは何故であろうか。

眞実愛（慈悲）は決して、人間のものでなくて、如来心そのものである。聖人が「小慈小悲」もないと告白されたのは、この大慈悲に値あれたからであり、否定の声を聞いていられるからである。それであるのに聖人の上に我等が大慈悲を感じるの、如来が聖人の全てであるからだ。聖人の上に如来を拜むからである。

凡夫は、慈悲を求めないで愛を求める。「貴方だけが、可愛い」という言葉を求める。しかしそれが、教育の上に用いられると、教師も子どもも傷つかなければならぬ。い。

仏は何時も「十方衆生」とよびたもう。十方衆生一視同仁の大慈悲である。

一切衆生平等の慈悲といえ、浅いように考え、冷たいように考えるのは、人間の迷情である。

十方衆生平等の眞実なればこそ、最後の一衆生をも、救いきるのである。平等の慈悲はやがて悪人の上に一番深い。

深い眞実愛に感ずる心は深い眞実愛の心である。

阿弥陀仏は、絶対の眞実であり慈悲である。この眞実を、眞実として信ずる心は、南無である。その南無は、そのまま仏心である。即ち、南無と阿弥陀仏は一体である。如来は如来を信ずる心を与えるのである。

救いとは、如来の大慈悲心が、衆生的人格内容となることである。

眞実愛に遠ざかったものほど、自分の愛のないことは言わずに、他人の冷たいことを裁く。眞実に対する眼が開いていないからである。

ヒステリーの女は、何時も家庭を非常時にする。しかも自らが非常時の中心であることを忘れて人を責める。

何事がおきても、動かず、たじろがず、ゆるがぬ相は、大きな愛の相である。ヒステリーの女は何時も狂乱の如く動き騒ぐ。

何事がおきても「俺が知っておる。安心せよ。」といった型の校長は部下に、親の如く、師の如く信頼され、職員が恋をすれば、問題がおこれば、すぐにあわてて県庁に一々報告するような校長は、近い中に辞表を出さねばならなくなる。

真実愛は春のように温かである。だからこそ、その周囲を育てるのである。一生、人を育てる人になるか、一生、人に迷惑をかける氷のような存在になるか。

真実愛の呼吸を続ける人も苦しむ。だがその苦しみを逃避出来ない所に、真実愛の人格がある。

そして真の人生の歓びは、この人へのみ許される。

深い愛は、自覚から生れる。大信は自覚の極致である。

青葉の上に霜が下りると、真紅な紅葉が出来る。

樹木は、霜に会うことは辛いにちがいない。

秋霜烈日の如き厳しきをもつて時に打ちのめしてくれる人を持った人は幸である。愛は、時に鞭となる。痛い痛い鞭となる。

秋霜、愛を語らず、善知識と名のらず。我、思はず微笑す。

2

真愛は、大法より現われ、真理の如く我を生活せしめようとする。

だから時に、真愛は痛い。

医者患者の一時の涙を問題にしない。

真愛の人はいざと言う時輝き、それでない者は言葉を美しうして逃げてゆく。

損になりそうな時は、逃げてゆくのも人間であり、命をはめても飛び込むのも人間である。

本部が建つだらうと、数年前から、一足の下駄すら買わないようにして貯蓄して下さる方もあれば、本部が建つそうなど言うので、講演会にすら出席しなかった人もある。

真実の表現は、財産に、地位に、身分に正比例せず。

貪欲が人格の王座をしめると、真実愛はかくれる。

我に都合よき人を大人物と言ひ、我に都合悪き人を悪人と言ひ。この人こそ、世にも恐るべき存在である。我自らを誠む。身の窮亡はこの人につきものである。

松の緑、千古に変わらぬ。真実愛は一貫する。一貫するが故に、自ら節操をもつ。

施されて恩を忘れず、苦しめられ、裏切られて恨まず。ここに至って真人格の至境と  
言うべし。我自らを愧ず。

凡夫も復讐し、聖者も復讐する。

凡夫は、呪いをもってして、相手を倒して満足せんとし、  
聖者は、真実愛をもってして、相手を更生懺悔せしめる。

真実愛は、まず懺悔によりてはじまり、自己を知ることによって深まり、大法真理  
によって成就し実践によって世の光となる。

ゆけ、真実愛の菩薩よ。

今こそ如何なる分野になりと行け。

如何なる運動になりと参加せよ。

社会はこの人を待つ。